

1867年労働者住宅モデルの修正

—建築家ヘンリー・ロバーツに関する研究 その2—

小川 圭子

ヘンリー・ロバーツの共同住宅モデルについては日本のnLDK¹⁾の原型と言われるが、Living Roomは日本の居間と言われるものと大きく異なり、ロバーツモデルと日本のnLDKモデルとの関連は明らかになったとはいえない。労働者モデル住宅修正プランの分析から、1853年以前のモデル住宅をSculleryのSを用いてnLS住宅モデルと名付ければ、1867年修正住宅モデルには新たにKitchenの概念が導入され、nLK住宅モデルと名付けることができ、これはnLDK住宅へと展開する前段階と位置づけられる。又、このような新しい住宅モデル提案は、熟練労働者から未熟練労働者まで収入に大きな差がある労働者階級に対する、各階層に対応できる多様なモデルの検討の結果であることも明らかになった。

Key Words : ヘンリー・ロバーツ 労働階級住宅 Kitchen Entrance
Living Room with space for Bed

1. 研究の意義・目的・背景及び方法

1-1 研究の目的

イギリスの現代住宅に大きな影響を残したヘンリー・ロバーツ（以下H.ロバーツ）は19世紀半ばに活躍し、田園都市を実現したレイモンド・アンウィン²⁾は20世紀初頭に活躍する。しかしH.ロバーツが1851年提案したロンドン万国博のモデル住宅とアンウィンが1898年提案したブラッドフォードの職工用コテージ計画案³⁾の住宅平面に大きな相違は無い。現代的なnLDKに至るH.ロバーツの提案した様々な集合住宅特に共同住宅の平面は20世紀初頭のドイツを中心とした新しい住宅運動とどのような関連があるのか。特に共同住宅のあるべき姿を追求したH.ロバーツの挑戦はLiving Room + Scullery + Bed Roomで収束してしまったのか。このような疑問に答えるためにH.ロバーツの1867年の労働者住宅の修正案⁴⁾を分析する。この修正案については日本における議論は無く、又筆者が知る限りイギリスにおいても検

討されたことが無い。本論では、この資料の分析をとおして、H.ロバーツのnLDKへの流れを検討する。

1-2 研究の背景

1862年12月 H. ロバーツ は、RIBA (Royal Institute of British Architects : 王立建築家協会) で12年ぶりに講演を行う。1853年病を得てフィレンツェに移住して以来のことである。これを契機に住宅問題に対するH.ロバーツの理想主義的アプローチに対する批判が起こる。これについてはRIBAのアーカイブからその概要を知ることができる。特に1866年カー教授によるワンルーム住宅大量供給⁵⁾による住宅問題の解決への提案が出され、H.ロバーツに対する批判を強める。これに応じてH.ロバーツが新しい住宅モデルを提案した、「労働者階級の住宅第4版」を上掲する。

1-3 研究の方法

Dwellings of the Labouring Classes (Fourth Edition 1867 Appendix)の資料, Housing, Dwellings

and Homes Design theory, research and Practice Roderick J. Lawrence 1987 (ヨーロッパの住居計画理論鈴木成文監訳) 及び Cottage Building (C. Bruce Allen 1849) 等の文献による。

2. H.ロバーツによる1867年モデル住宅の修正

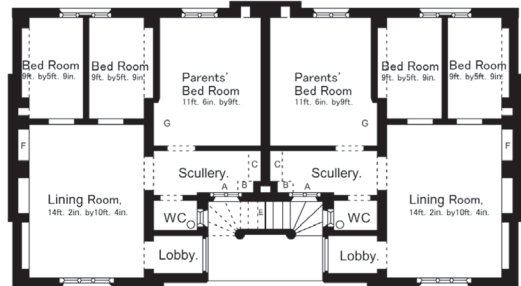
H.ロバーツは1862年12年ぶりにRIBAで労働者住宅について講演した。その内容は「健康住宅の本質及びその効用」として「労働者階級の住宅第4版」に収録されている。H.ロバーツが提案する共同住宅モデルとしては1851年のロンドン万博に出品したのも他、ストレッサム・ストリートのモデル住宅、ウィンザー・ロイヤル・ソサイエティが供給した共同住宅がある。

このH.ロバーツの講演後1866年、カー教授が、H.ロバーツの考え方を理想主義として批判する。その内容は住宅問題を解決するためには、H.ロバーツの提案する3寝室を放棄しワンルーム住宅を大量に供給すべきであるとの提案である。ワンルーム住宅といえばペントンヴィルのローア・ロードの集合住宅で単身者用住宅として計画しているが、単身以外の家族がワンルーム住宅に居住することをH.ロバーツは全く想定していない。

これについては、ゴッドウィン⁶⁾とカーの論争があり、ゴッドウィンはビルダー誌上でこれについての批判を展開している。ローレンス⁷⁾によればゴッドウィンがカーの提案を論駁したとある。住宅問題を解決するためには常に避けて通れない問題である。イギリスのような国力の上昇期には貧弱なストックを多数形成することは結果としてスラムのような地区を生み出すことになるという意味で、ゴッドウィンの批判は時宜を得たものであるといえる。しかし、それでもこの過程で供給された共同住宅はイギリス人にとっては評価される住宅にはならなかった。そして、テラスハウスが人間の住むにふさわしい住宅と認識される。

この批判に対して翌年1867年出版された修正案では、これまでの原則を変更したモデルを提案している。この修正案はH.ロバーツの設計原理を検討するに非常に興味深い。その平面図は、「労働者階級の住宅第4版」のp.123に収録されている。

タイトルは「都市内の労働者住宅の平面図」とされており、3パターンの新しい提案が行われている。



- A Sink, with Coal Box under.
- B Plate Rack over entrance to Dust Shaft. D.
- C Meat Safe, Ventilated through hollow bricks.
- E Staircase of Slate, with Dust Place under.
- F Cupboard warmed from back of Fireplace.
- G Linen Closet in this recess if required.

図1 ロンドン万博出展のモデル住宅

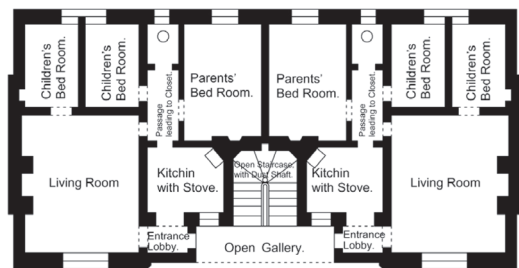


図2 ロンドン万博出展のモデル住宅の修正案1

第1は、1851年「ロンドン万博のモデル住宅の修正案」(図1、図2参照)である。以下修正部分の検討を行う。

1) SculleryからKitchenへの変更

Sculleryとは流し場である。この時期のイギリスの労働者階級の住宅においては煮炊きを中心とした調理はLiving Roomで行われており、洗ひ物は調理であれ、洗濯であれ、このSculleryでおこなわれていた。しかし、修正案ではKitchen with Stoveとなっており、調理ができる暖炉付の台所が提案されている。テラスハウスのSculleryには備え付けられているCopper以上の機能を果たすStoveを設けてLiving Roomから調理が分離し、Kitchenが労働者住宅においても成立しつつあることが伺えるのである。

2) 個室の配置

更に興味深い点は、個室の配置において基本の3寝室を維持しながら、個室の関係を変更していることである。つまりLiving Roomに開く寝室は1室とし、台所から廊下を介して主寝室と他の1寝室にアプローチする形になっている。3寝室確保の理由は、主寝室の確保と子供の性別就寝の確保である。この1室のみLiving Roomに開く理由は、①性別就寝の徹底、この時代の居住形態として②家族だけでなく間借り人も一緒に居住することもあり、そのような状況での性別就寝の徹底、更に家賃支払いといった③経済的な問題から1部屋を他人に貸すことが行われている。つまりこのような居住形態に対応を可能とするような平面構成と考えられる。一般に都市に流入する労働者は農村地域からの移住者が多く、その生活様式を継承している。ローレンスによれば、1800年以前、農業労働者は1室住居に家族全員が居住していたことが一般的に認められているとしている。しかし、これを実証する記録は少ないとも言われる。そしてクーパー⁸⁾が示すように1800年代には2室住宅に発展した。追加された1室は寝室として利用された。そこには「両親と子供たち、男の子と女の子の別なく混ざり合って使われ、時には間借り人も同じ部屋に寝ていた。」このように1800年代には寝室の分離は行われたが、性別就寝は行われていなかった。チャドイックのレポートに見られる混乱した状況も当時の農業労働者の居住形態としては特異なものではなかった。その生活様式をもって都市に流入してくることによって、更に過密に密集して居住することによって様々な問題

が発生したといえる。この問題を住宅平面計画によって解決しようとした点、理想主義と揶揄されることになった。しかし、H.ロバーツがこの3寝室にあくまでも固執したのではないことは、既に1851年のウィンザーの共同住宅では2寝室型を提案していることでも明らかである。又、アレン⁹⁾など当時の建築家が提案する平面計画からも、性別就寝を徹底させ厳格な性の管理を目指す方向性が認められる。この傾向は一定程度普遍性があり、クワイニー¹⁰⁾が述べているように、トゥーアップトゥーダウン住宅といわれる住宅が一般的に居住される中で、性別就寝を確保するために男子はLiving Roomにベッドをおいて就寝したとあり、民間の中でも自然な形で性別就寝を確保している。

第2は、労働者階級の低所得者に対応した2つのモデルである。この時期のいわゆる5%慈善住宅供給であっても、つまり投資に対して配当を5%以内に限定した住宅供給であってもそれから算定される家賃は労働者階級の低所得者層にとっては支払い不可能なものであった。そこで、その支払能力に対応した家賃を設定するためには建設費を低く抑える必要がある。そこで設備共用(図3)のものと同設備専用(図4)のモデルに分かれる。この方式は、ピポディトラスト¹¹⁾でも採用した方式であるが、H.ロバーツの場合、あくまでも共用するものを最低限度に抑える点に、その特徴がある。

まず設備共用(図3)のものを検討する。共用する設備は便所である。共同住宅であるから共用階段、共用廊下は当然である。便所は階段の踊場、中間階に設けている。これは便所の個数を減少さ

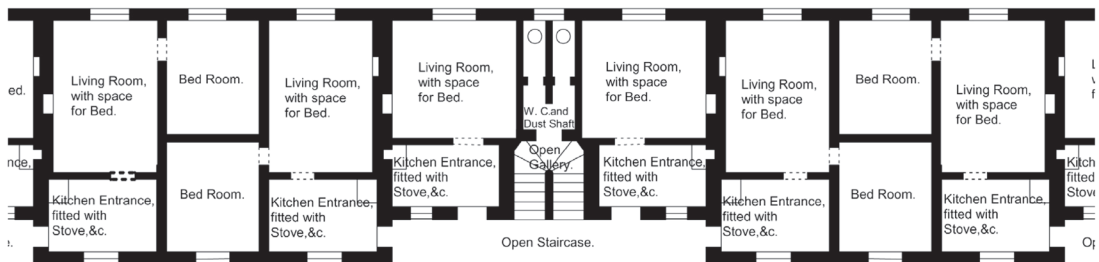


図3 ロンドン万博出展のモデル住宅の修正案2

せることができる。1階段、1フロアーには4戸アクセスが可能である。住戸タイプは2種類のタイプを設定している。

1つは、Kitchen Entrance fitted with Stoveと1つの部屋からなるものである。この部屋はLiving room with space for Bedと名づけられている。他はKitchen Entrance fitted with Stoveと2室からなり、Living room with space for Bed及びBed Roomと名づけられている。

Kitchen Entrance fitted with Stoveは、先のモデルのEntrance Lobby とKitchen (with Stove)を統合したものである。2室住宅において、先のイギリス民家に見られるダイルームと寝室の構成をとらずに、キッチンとリビングに分割している。リビングは3寝室確保できないのでLiving Roomにベッドを置くという対応をしている。つまり、原初的にはワンルームであった住宅から、便所を分離し、流し場とリビングルームにあった調理機能を台所に統合し、リビングルームと寝室を転用できるようにし、住宅の機能を検討しながら、ワンルーム住宅で供給するのではなく、区分することによって生活の仕方に秩序を与えるというのがH.ロバーツの基本的な考え方である。

後者は2室の一方にはBed Roomを確保している。他はLiving room with space for Bedつまりリビングと寝室が転用できるようになっている。この平面図を見る限りベッドを収納するスペース

は無いので箱ベッドのようなものがコーナーに置かれると推測される。

このように建設コストを下げるために便所は共用にしているが、玄関を分離し、各家族の分離独立を志向している。ロビーと台所を統合し、暖炉を設ける。又やむを得ない場合はリビングと寝室を転用できるようにする。この計画では、リビングには暖炉を設けている。しかし2室については寝室に暖炉を確保できていない。この傾向は、プランニングの方法にもよるが、3寝室のうち1室に暖炉が設けられないことはやむを得ないと考えていることと考え方は一貫している。

次に設備専用(図4)のものを検討する。基本的部屋の構成は設備共用(図3)と同じである。各住戸に便所を設ける場合は、Kitchen Entrance fitted with Stoveに入口を設けている。この考え方はロンドン万博のモデル住宅において洗い場(Scullery)の一部に便所を設けた考え方と同じである。暖炉の取り方も寝室については1室暖炉無の原則を貫いている。

設備共用のレベルをどの程度認めるかについては、様々なレベルがある。1894年L.C.C.が供給したバンダリー・ストリート・エステートでも、便所、洗い場が共用である。公的な補助金を見込んでも、支払能力との関係では設備専用を実現することが困難である事情が伺えるのである。

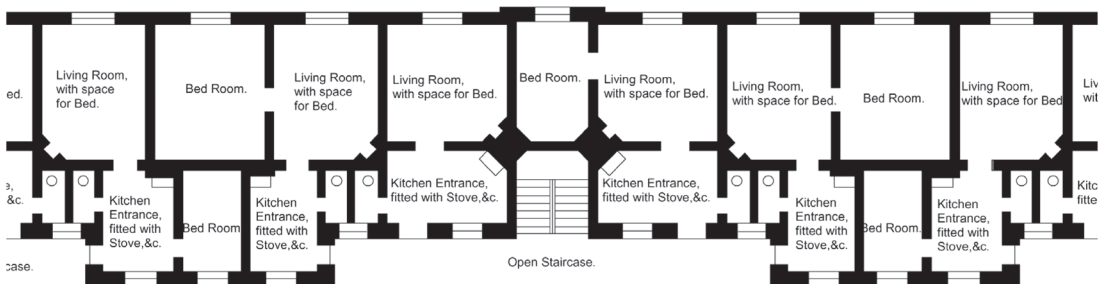


図4 ロンドン万博出展のモデル住宅の修正案3

3. まとめ

- 1) H.ロバーツは、労働者住宅モデルとして、イギリスの民家型住宅に見られるLiving Room + Bed Room + SculleryからいわゆるnLDKモデルへの移行を視野に入れていた。厳密に言えば、nDKモデルへの移行を視野に入れていた。
- 2) H.ロバーツは理想主義と批判されたが、現実対応の中で新しいモデルを発見してきた。特に予見を持たない柔軟な姿勢に支えられた設計態度は、機能の統合と室の再編を行い、単に機能分化を部屋に展開するだけでなく、現実的な枠組みの中で機能と新しい空間を発見した点、極めて建築家的なアプローチである。
- 3) 結果として台所の実現。つまりnDKのKの独立であり、この点はDKがまず形成された日本とは異なっている。

引用図版

- 1) Roberts, Henry, *The Dwellings of the Labouring Classes, Their Arrangement and Construction, With the Essentials of a Healthy Dwelling.*, The Society for Improving the Condition of the Labouring Classes, 1867 (Fourth Edition Revised and Enlarged), p.121
- 2) 前掲書1), p.123
- 3) 前掲書1), p.123
- 4) 前掲書1), p.123

参考文献

- 1) C.Bruce Allen, *Cottage Building*, 1849
- 2) Roberts, Henry, *The Dwellings of the Labouring Classes, Their Arrangement and Construction, With the Essentials of a Healthy Dwelling.*, The Society for Improving the Condition of the Labouring Classes, 1867 (Fourth Edition Revised and Enlarged)
- 3) 小川圭子「建築家ヘンリー・ロバーツに関する研究 —19世紀労働者階級住宅の計画設計に果たした役割—」東京家政学院大学紀要第50号人文科学系 2010

- 4) 小川圭子・杉本茂・大橋竜太「プリンス・コンソート・コテッジについて ヘンリー・ロバーツの住宅計画に関する研究1」(社)日本建築学会2010年度大会学術講演梗概集 2010
- 5) アンソニー・クワイニー, 花里俊廣訳「ハウスの歴史・ホームの物語(下) イギリス都市住宅とコミュニティ」住まいの図書館出版局 Appendix 1995
- 6) ニコラス・ペヴスナー, 鈴木博之+鈴木杜幾子訳「美術・建築・デザインの研究II」鹿島出版会 1980
- 7) ロデリック J.ローレンス, 鈴木成文監訳「ヨーロッパの住居計画理論」丸善株式会社 1992

注釈

- 1) nLDKとは、nは寝室(又は個室)数、LはLiving Room(居間)、DはDining Room(食事室)、KはKitchen(台所)を示す。19世紀イギリスにおける労働者階級の住宅におけるLiving Room(居間)はScullery(洗い場)やBed room(寝室)で行わない機能がすべて展開される。この意味で日本のnLDK住宅モデルが示す内容と異なるので、ここでは、モデル住宅をnLS住宅モデル、修正モデル住宅はnLK住宅モデルと表示した。
- 2) レイモンド・アンウィン(Raymond Unwin 1863-1940)は、イギリスの都市計画家。バーリー・パーカー等と実際のガーデンシティを設計・実現した。
- 3) ブラッドフォード レイモンド・アンウィンとバーリー・パーカーが計画した住宅計画。
- 4) 労働者住宅の修正案 1868年に出版した「労働者階級の住宅第4版」に新たに掲載された住宅案。ロンドン万博に出品されたモデル住宅の修正案として発表された。
- 5) ワンルーム住宅大量供給 Kerr(ロンドン大学教授)は「3寝室の住宅は破棄されるべきであり、ワンルーム住宅こそが建設されるべきである」と推奨した。(ヨーロッパの住居計画理論 p.133 1992)
- 6) ゴッドウィン(George Godwin 1815-1888)

イギリスの建築雑誌The Builderの編集者、
建築家。

- 7) ロデリック J. ローレンス (Roderik J Lawrence) 「ヨーロッパの住居計画理論」の著者。
- 8) クーパー (Cooper, Nicholas)
- 9) アレン (C. Bruce Allen) イギリスの建築家。日本で初めて建築専門書として翻訳・紹介された「Cottage Building (西洋家作雛形)」の

著者。

- 10) クワイニー (Anthony Quiney) 「ハウスの歴史・ホームの物語 (上・下)」の著者。
- 11) ピボディ trusts ピーポディ George Peabody (1795-1869) はアメリカ合衆国出身の企業家が慈善事業として、1862年ロンドンにピーポディ慈善基金を設立貧民のための住宅供給を行い、今日まで存続している財団。

(受付 2011.3.25 受理 2011.6.6)